

2008年 冬の厳寒さくら道ひとり旅

(2008年11月22日～11月24日)

山猫@滋賀

さくら道を走りたいという思い

10月初めだったか、ふきこさんが金沢に行く際に車でさくら道を北上して向かわれたこと。愛知のG藤さんが2週間前に白鳥から森本まで走られ、波多パパ&ママにお会いされたことを知った。今年は4月末のゴールデンウィークに走る予定をしていたが、都合で走りには行けず、今年は諦めていたが、間もなく冬になるというのにさくら道に行きたい気持ちが抑えられなくなり、11月末の3連休で走ろうと決意する。

春に予定したのと同じ、郡上八幡から金沢までのコースだ。コースは地図を見なくてもわかるので、10時に郡上八幡をスタートし、金沢には翌日の日暮れ後に着く予定を組んだ。知り尽くしたコースなので、別段何の心配もないが、歩道がないところをひとりで行くので危険と隣り合わせという部分だけが心配材料だ。それを言えば、どこにも行けなくなる。

さくら道に恋いこがれ、心の友としてのさくら道を今年も走れる喜びがある。走るだけでなく、これからは世の中不景気で厳しさは増す一方である。そんなご時世の中、さくら道を走るとは人生への問い掛けをする修行でもあった。辛くても、苦しくても、そんな中でさくら道は何かの答えを出してくれるのではないかという気がしていた。

直前のトラブル

3日前の水曜日、夜ランをしている最中に時計のストップウォッチのラップを押しても反応しなくなり、そればかりかモードの切替もできないため、現在時間を見ることができなくなった。潰れてしまったのだ。

あまりにもタイミングの悪い偶然だったが、夜に同じカシオの時計をネットで見つけたので、すぐに注文した。翌朝に入金すれば、金曜日中には物が届くだろうと甘く見ていたら、最短で土曜日でないとは届かないとわかり、時間さえわかればと100円時計を買う。金曜夜に風呂に入った時に長年の癖で、普段同様に時計をしたまま湯に浸かってしまい、気付いた時には液晶は消えていた。

何をしても時間がわからなければ大変。幸いにも壊れた時計でもストップウォッチだけは勝手に動き続けている。とりあえず夜中でもラップを書き出せば現在の時間算出はできるのでこれを使うことにした。今はこれしか使うものがなかった。

当日

朝6時に起き、6時半頃に家を出て、岐阜に向かう。米原で乗り換えて岐阜方面に向かう電車に乗ってすぐ、携帯がないことに気付く。車内に置き忘れたのだ。まだ大垣行きは発車していなかったので、車掌に事情を話しているうちに発車時刻になった。この時、大垣行きに乗るか、携帯を追って長浜に向かうか躊躇したが、即対応できるという面で大垣行きに乗ることにした。車掌から連絡があり、長浜でそれらしき物が見つかったと聞いてひと安心。岐阜行きに乗り換え、岐阜駅で駅員と確認の結果、自分の物に間違いなかった。これから3日間は不便だが、見つかって、心配しながらのさくら道にならなくて良かった。

荷物を「金沢ゆめのゆ」に送り、岐阜バスターミナル8時52分の高速バスで郡上八幡に向かう。東海北陸道から見る美濃の丘陵地の紅葉はやや終わりに近づいているが、陽光にさらされて鮮やかだった。美濃から美並に入るとさくら道のコースと高速とが交差し、懐かしく眺める。山深くなり、紅葉はさらに色濃く鮮やかだ。美並では「日本まん真ん中センター」の横で高速から一旦降りて、再度高速に上がった。この辺りはいつも苦しいところで、数年前が懐かしく感慨深くなる。バスは「郡上インター」で高速から降りるとすぐのところに岐阜バスの八幡営業所がある。予定より2分早い9時57分に到着した。



岐阜バス・八幡営業所(スタート)

11月22日 10時00分



動き続けるストップウォッチに目をやり、岐阜バス営業所の時計が10時ジャストになったのでスタートする。ストップウォッチは64時間21分、これがAM10時となる。郡上八幡はこの時、5℃と見たより、かなり低めだった。

長袖シャツに1年半振りのロングタイツ、シューズは過去から擦れてマメの心配はあるが、下りを考えてサッカニーのアズラ、寒さで手がかじかみ、物が取り出せないと困るので大きめのデイパックを背負うことにした。デイパックの中には痛み止め、胃薬、傷テープ、メンソレターム、ティッシュペーパー、ウインドブレーカー上下、重ね着用の半袖シャツ、毛糸の帽子、手袋3種類、タオル、LEDライト2個。ケア品はいつも持たない。



気持ち良い向かい風を受けながら、北へ向かう。この辺りは3連休とあって車の数が多かったのも、歩道のない道路では十分に注意を払う。左側の山々の紅葉も終わりを告げるかのような色合いだが、山がV字型になっているので、私の住んでいるところとは違い、針葉樹はまだまだ鮮やかさを残していた。30分も走れば、陽差しが強く、汗がかなり吹き出してきた。



今回の荷物は今までより重い分、ペースはゆっくりだ。「JAめぐみの大和」前に到着。さくら道があった頃はここで温かい食事を頂けたことを思い出す。ここのエイドの名物おばあさん、本田よのさんは今、どうしてられるのだろうか？。もうかなりの高齢だ。もう少し行くと屋根のところどころに白い物が見え始めた。雪だ。進む毎に白さが増し、この先の積雪が心配になるが、いきなり弱音を吐いてはいられない。ふと道路反対側の自販機を見ると何と50円と書かれていた。これは得したと思って購入。50円自販機は初めて見た。



走り始めた頃に比べて、デイパックが馴染んできたのか、軽く感じるようになっていた。徐々に雪の姿は増して歩道も濡れているところが目立つ。雪解け跡の大きな雪の塊が道路脇にあった。大雪が迫って来ている。



日当たりの良い民家の南側に母親と4歳くらいの男の子が日向ぼっこをしていた。私の姿を見て、その男の子は歩道側に駆け寄り、「おっちゃん、頑張ってるね！」と大きな声で2回声援をしてくれた。声援されるような格好良さ



なんて何もないけれど、心温まる声は涙が出るほど嬉しい。

道路脇で綺麗な紅葉が見られた。真っ赤な紅葉に黄色の銀杏のコントラストが見事だ。遠く一面雪化粧なのに目の前は鮮やかな紅葉、こんなさくら道を走れて幸せに思う。陽射しが強いので汗はどんどん吹き出す。



白鳥に入ると歩道のない道路が続く。「日本土鈴館」前を通過。いろいろな玩具や招き猫がたくさんショーウィンドウ越しに見える。しかし、人の姿はなかった。この先の寒さを考えて、カイロを購入しようと思うが店がなかなか見つからない。歩道脇は雪解けでベトベト状態、走りにくい。シューズが濡れたら大変なので、気を遣って進む。左に見える長良川の向こう岸は一面真っ白になってきた。そんな時、前に「コメリ」が見えたので貼るカイロを

1箱買う。店内は暖房しているので、入った瞬間に大汗が吹き出し、汗拭きに追われる。

白鳥市街地手前の高架下では気温が11℃を示していたが、冷たい風が吹き、とてもそんな気温には思えなかった。真っ直ぐに進めば白鳥の市街地、ここで左折して「奥美濃大橋」を渡るが、歩道は雪で通れない。いよいよ銀世界のさくら道に入った。橋上の右側には「白山」が見えた。日本三名山のひとつで、こんな綺麗な白山は初めてで感動する。ここからは顕彰碑に向かう坂道がある。今でこそ、民家のどこをどう曲がれば良いかすぐにわかるが、地図を見たぐらいではわからない顕彰碑への道だ。ここは流れている水に勢いがある、大きな音を立てて流れている。顕彰碑への道はもしかして雪解けされていないのではないかと、思って上ったが、一般道同様に綺麗に雪解けされていた。この狭い路は坂峠に向かう旧街道であること



を初めて知った。

桜守佐藤良二君顕彰碑(18.8km)

11月22日

12時19分



顕彰碑手前には銀杏とアズマヒガン桜の大木がある。真っ白な雪の上に黄色い銀杏の落葉した姿は何ともいえないものだった。この桜は「藤路の桜」と呼ばれ、樹齢400年もの年月生きてきた古木で生育のためだと思うが、枝が落とされて寂しい感じがした。白鳥の象徴のような「藤路の桜」の下に顕彰碑が建てられたのだと思う。「桜守佐藤良二君顕彰碑」の上には30cmくらいの雪が積もっていた。良二さんが人生の全てを賭けて、人生への問い掛けをしたさくら道の象徴がこの顕彰碑だと感慨深く思う。雪

で真正面には行けなかったが、さくら道に来ると、ここをワープするわけにはいかない。ここからは真っ白な白鳥市街を一望できた。右のはるか頭上にある「油坂峠道路」の雄大なロータリーの迫力に圧倒される。ここからは下りで上って来た道を途中から左斜めに進み、下りを向小駄良方面に向かうと多数の民宿がある。



「向小駄良防災センター」の向かいの公園には2004年6月に行われた「さくら道交流会」でさくら道を愛する仲間達と共に植えた庄川桜の実生が2本植えられている。公園一面は雪に覆われ、その隅に2本の桜は葉が枯れて、みすぼらしく立っていた。1年半前に見た時よりも小さくなっている感じでとても残念だった。ソメイヨシノなら1年で大きくなるのに、アズマヒガンはそれほど難しい桜なのだ痛感する。1年半前は春だったので葉が青々していたせいもあると思うが、背丈が低くなっていることも気になった。この先、時間を掛けてでも大きくなってくれることを願って、先に進む。



向小駄良の交差点を左折し、再び国道156号線に戻る。初めてさくら道ウルトラを走った2001年はここで盛大なエイドが開設されていて、あまりのおでんの美味しさにお粥をお代わりしたことを思い出す。私設エイドながら、あの時のエイドの豪華さは凄かった。国道へ出たところに民宿「さとう」があるので、昼食を摂るために店に入る。店は満席で繁盛していた。この民宿兼食堂は交流会の時に泊めて貰った宿で、朝方までY重樫さんやN瀬さん達と飲んでさくら道の思い出を語り合った場所ただけに、昼食は「さとう」でと決めて走っていた。Y重樫さんがネイチャーとさくら道を連ちゃんされた時、途中ここで数時間、朝になるまで寝られたが、それでもゴールされたこともあった。



店内は暖かい。汗臭いので遠慮がちに端の方に座って、鯖の塩焼き以外はお任せにすると煮物、みそ汁、ご飯、漬け物が出てきた。小芋の入った煮物は実に美味しかった。走っていると煮物なんか食べられないので嬉しくなる。ご飯のお代わりもした。隣の年輩の方から「どこまで行きなされる?」「金沢まで行く予定です」「そしたら今晚は平瀬で泊まりなされるのか?」「いえいえ、寝ないで金沢目指します」「気を付けてな」「ありがとうございます」、そんな会話をした。奥の男性からは「ネイチャーのサポートした時、リタイヤした人を椿原橋まで迎えに行ったことあるんだわ。遠かったなあ〜」などという言葉も返ってきた。おかみさんに「交流会の時、泊めてもらった思い出があるんです」と話して店を出て行く。30分弱の休憩で、時刻は13時前になっていた。



外は陽が強かったこともあって、道路は乾いている部分が多い。特に右側車線はよく乾き、左側は乾きが悪い。左側はすぐ山が迫っていて、陽当たりが悪いからだろう。若干、道路の傾きの関係があるのかもしれない。積雪は15cmくらいだろうか。今までと違い、風が急に冷たく感じる。白山下ろしだろう。右のローソンでチーズスティックパンを補食に買って先を急ぐ。気温は4℃を示していた。寒いはずだ。道路脇には大きな除雪車が置かれてあった。これが住民の安全を守っているのだ。この先、五箇山までは道路脇の至るところに大きな除雪車が何台もあった。真言宗の立派なお寺が左にある。ここからは今までとは生活風景、景色が一変し、豪雪地帯らしくなる。道路はきれいに除雪されているので、歩道は雪で覆われているので、この先ずっと車道を進んだ。バス停があった。バス停は戸付きの小屋で寒さ凌ぎできるので、さくら道ではいつもお世話になる。



まだ走り続けられていた。暗闇を走っていても上っていることはわかるが、明るいと緩くても上りはきつく感じる。汗をかいているので、その汗で身体が冷え始める。右下には北濃小学校が見えた。どれくらいの生徒数なのだろう



うか。少し行くと左横を長良川鉄道の電車が通り過ぎて行った。長良川の右側の山々の紅葉が綺麗だ。雪と紅葉



のコントラストは見事だ。そして、のどかだ。「白山長滝神社」はその長良川鉄道の踏切を渡った向こう側にあった。右には「道の駅・白鳥」が見



える。ここまではいつも長く感じる区間だ。中に入って辺りを見回して、すぐに出て行く。真正面に見える白山は、先ほど奥美濃大橋から見た白山より、更に優雅な山に見えた。青い空に映え、見事だ。車の数は思ったより多い。影で歩道の積雪量は増え、車道を進んでいても左側なので水溜まりも多く、シューズが濡れないように気を付ける。



左に長良川鉄道の終点「北濃駅」が見えた。こんなに古惚けていたかなと思うほど、暗い感じの駅になっていた。雪の重みに長年耐えてきた雰囲気漂っている。入口横にあった潰れたラーメン屋の傾いた看板が寂しく映るが、奥美濃にはこんな風景もまた良いものだ。紅色の電車が止まっているが、ホームは雪の原。この標高は446m。だいぶ上って来た。



緩く上っているのがわかり、2、3km進む毎に明らかに雪の量が多くなっている。大きな右カーブのところ左の旧道に入る。ここをまた左折すると「ウイングヒルズ白鳥」と「阿弥陀ヶ滝」に行ける。車が通らないと思っていたら、旧道にも車が数台入って来た。再び、国道に戻ると車の通行量は

結構あるので、できるだけ左に寄る。高鷲町に入って、すぐ左の旧道へまた左折する。ぐるっと迂回する感じになるが、店も何軒かあった。軒先が雪に被われて家に入ることができない車が邪魔し、狭い道路なのに車が立ち往生していた。この辺りの家々は軒先に大きな木が立っているが、少しでも雪が積らないようにしているのではないだろうかと思像する。



再び、国道に戻り、「高鷲商工会館前」に到着。上を見上げると青空いっぱい晴れ渡って、山々が綺麗だ。歩



らいやった。猫は喰らい付いたが、あまり美味しそうではなく、嫌な顔をしていた。右下には「湯の平温泉」の建物の屋根だけが見えた。歩道から下を見ようとしても歩道は一面雪で近寄ることができず、全体を見ることはできなかった。

道橋の下を右折して、高鷲の旧道に入っていく。一旦、高鷲市街に入り、すぐに左に折れて進んで行くことになる。屋根を見ていると30cmくらいの積雪がある。白鳥より明らかに多い。60歳を超えていると思われる男性が屋根に上がって雪降ろしされている光景を目にする。豪雪地帯は大変だ。その先の広い道路に一旦出るとサークルKがあるので寄ってプリンを買う。寒い外のベンチに座って食べていると猫が2匹、近寄ってきたので、半分く



上を上って行く姿が見える。昔の旧道との分かれ目からは幅が広く、平坦に近い新しい道路に変わり、歩道も広い。右にバス停があり、50cmくらいの雪を被っている姿が、雪国という感じをさせる。車道に雪はないが、それ以外は一面真っ白だ。

「猪洞橋」を渡って右折、また国道に出る。この先は蛭が野まで8kmあり、300m上らないといけない。右にレストランがあるが、営業している様子はない。高鷲市街からはずっと上りなので、歩き続けた。山々は茶色付いているが、濃さが違うのでまだまだ色具合は綺麗だ。そこに積もった雪に太陽の光が当り、雪の点となって光っている。別世界みたいだ。「節谷トンネル」を越えて、ただただひたすら上る。抜かして行った車はるか右頭



少し下ったカーブのところが西洞の集落、「ダイナランドスキー場」の入口だ。どの家も雪の合間のひと時に雪降ろしをされていた。老若男女問わず、今のうちにしなければとばかりに、中には2階上の屋根に上って雪降ろしさせている方、中年の女性もスコップを持って雪下ろしされていた。雪国の人の強さを見た思いだ。この先は一時的に道路が狭くなる。その後はきつい上りに変わり「銀白荘」という民宿が右にある。ここはいつも目に付くところで、苦しくてひと休みさせて欲しくなる場所だ。ダイナランドを越え、蛭ヶ野の上りになるとさすがに道路の乾きはなく、路面は湿って冷たい。気温は3℃だが、体感温度はもっと低く感じる。

少下ったカーブのところが西洞の集落、「ダイナランドスキー場」の入口だ。どの家も雪の合間のひと時に雪降ろしをされていた。老若男女問わず、今のうちにしなければとばかりに、中には2階上の屋根に上って雪降ろしさせている方、中年の女性もスコップを持って雪下ろしされていた。雪国の人の強さを見た思いだ。この先は一時的に道路が狭くなる。その後はきつい上りに変わり「銀白荘」という民宿が右にある。ここはいつも目に付くところで、苦しくてひと休みさせて欲しくなる場所だ。ダイナランドを越え、蛭ヶ野の上りになるとさすがに道路の乾きはなく、路面は湿って冷たい。気温は3℃だが、体感温度はもっと低く感じる。



「道の駅・大日岳」が見えた。トイレに行くが、階段は積った雪が踏まれて凍結、滑りそうだ。ここからは一旦下り



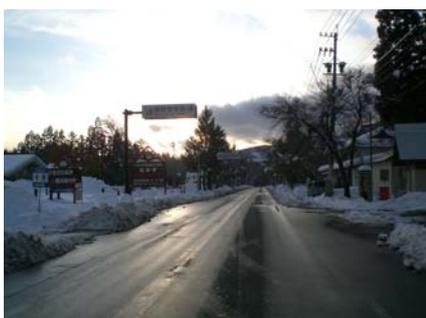
になるので走ることにした。平瀬温泉到着時間との関係から、蛭ヶ野分水嶺に16時までには着きたかった。下り切ったところに「駒ヶ滝」がある。洞門を越えると標高830mの表示があり、急な上りに変わる。陽当たりが悪いので、道路には雪解け水が浮き、シューズが濡れないように避けて進んだ。この日は白鳥からダンプカーがやたら多かった。上り坂に入ってから10分も経たないうちに蛭ヶ野に到着できた。

ひるがの分水嶺(41.1km)

11月22日 15時56分



辿り着いてすぐ左の「蛭ヶ野峠」に「蛭ヶ野分水嶺」がある。あまりの凄い雪に覆われ、どこから入れば目の前にある分水嶺に辿り着けるかわからなかった。踏まれたところがあったので進む。石碑には太平洋、日本海と書かれていて、その後ろに長良川と庄川に分かれる分水



嶺があるが、そこは厚い氷で覆われていた。今回でこの分水嶺を見るのも7回目。さくら道の中で875mと一番標高の高いところにある蛭ヶ野に辿り着くとひとつ目の安心できるポイントに着けたと感じる。空はやや暗くなり、日暮れは近い。「蛭ヶ野高原」を進むと道路脇にはどか雪の山があちこちにあった。その割りに

路面は乾いている。積雪は60cmくらいではないだろうか。

道路沿いにある「ひるがの高原スキー場」はまだオープンしていないようだが、いつでもスキーできる状態だ。2004年に入った店は足が思い切り伸ばせたので探すと見つかったが、開店していなかった。左に喫茶店があったので入ってカレーを注文した。店内の雰囲気は暗く、愛想の悪い店だった。カレーとサラダが出てきたが、キャベツは食べ難いので、サラダには手を付けなかった。履いていたアズラは指先がきつくて、かなり摺れて痛かったので傷テープで小指を巻き、また半袖ウェアを重ね着して店を出る。この先、平瀬温泉で食べるためのパンを買いに店に寄る。店主曰く「今日の日中は暖かい方。最近の最低気温は-4℃くらい。蛭ヶ野が一番標高が高いので、寒さはここがピークでしょう」と話された。



郡上市高鷲から高山市莊川に入ったのは16時46分。気温0℃、白山からの冷たい風の通り道で体感温度は完全にマイナス数℃の世界だ。底冷えする寒さ、風も額に当たって痛い。もう寒くてどうしようもないので、民家のガレージで防寒ウェアを重ね着する。上は6年振りに着るモンベルのゴアテックス、下は薄めのウインドブレーカー、毛糸の帽子、LEDライトも頭に付けて、もう1個は手に持つ。着た瞬間に寒さは消えた。これからは6kmほどの下りが待っている。もう真っ暗に近い。この先は歩道がない。時々歩道があっても、雪で通れない。道路の左脇ギリギリを車に気を付けて走る。車はそんなには通らないが、通る時はまとまって通り、来ない時は全く来ない感じだ。とりあえず早く庄川櫻に辿り着き、遅くても平瀬に20時には着きたいと思う。そうでないと予定が狂う。甘く見ていたが、全然時間的な余裕がないことに今頃気付いて慌てる。庄川櫻まで11kmの看板があった。



道路脇にはオレンジ色の外灯が数百メートル毎にあった。雪で覆われた寂しい道に電灯色の温もりが何ともいえない雰囲気、元気を貰える気がした。寂しい御手洗、滝ヶ野の集落を過ぎると「庄川であいの森」が見え、牧戸は近い。この辺りの田舎の家々は居間が奥にあるので道路側からは家の灯りが見えず、人が住んでいるのかわからないほど寂しい。「飛騨INFO庄川」で一服しようとしたが、真っ暗闇。休憩なんかできない。寒いので缶コーヒーを買うにも自販機ではなく店に寄った。愛想の悪い店主で、こんな格好をしているのだから、何か言って欲しかった。牧戸で開店している店を見たのは初めてだった。それだけ通過時間が早い。牧戸まで200m下ったので、雪の量はだいぶ減って40cmくらいだろうか。

「牧戸橋」を渡り、JRバス牧戸駅前を左折、御母衣ダム湖から庄川櫻を目指す。牧戸橋付近が枸杞さんと初めて出会ったところだ。ここからは先は外灯も一気に減り、真っ暗闇に近かった。LEDライトだけで足元を照らすには十分でなかったが、仕方ない。緩くても上りは歩き、下りは走った。左はるか前方にトンネルの入りらしき灯りが見えるが、岩瀬1号トンネルのようだ。左に大きく曲がるカーブを超えると「岩瀬橋」が見えてきた。



この橋も路肩がなくて危険な橋だが、夜で車は1台しか出会わなかったので助かった。夜といってもまだ18時。時間の空間が違い過ぎ、もう0時を過ぎたような雰囲気になってしまう。狭くて路面の荒れた1号、2号、3号とある3つの「岩瀬トンネル」を越え、ちょっと頑張る。右の高台に明るい白色の建物が見える。今まで見たこと



がないように思えたが、何だろう？。サイトで探しても何もない。不思議だ。少し先の「ドライブイン御母衣湖」にはかなり奥まったところに自販機があるので、パスして庄川櫻を目指す。薄暗いLEDライトの先に白樺の林が見えた。短い4つくらいの橋を渡ると庄川櫻だ。橋は黒くなって凍っているところもあった。もうそろそろだと思っていたら、庄川櫻に気づかずに過ぎていた。慌てて戻る。

庄川櫻(55.8km)

11月22日 18時20分

外灯があるはずと置いていただけになかったことがショックだった。時期がゴールデンウィークだったとはいえ、あの時は明るく外灯が照らしていた。なのに今日は何も照らしてくれていない。冬とはいえ、「庄川櫻」は旧庄川村のシンボルではないか。そんなことを思っても仕方がないので写真を撮るが、幹だけで精一杯だった。ほとんど見えないが、「照蓮寺櫻」「光輪寺櫻」に逢えたことに感謝しないと。それにしても凄い雪で、道路から近寄ることもできなかった。2002年、満開の庄川櫻に逢えたことを懐かしく思う。



気温は0°Cのまま。真っ暗闇の中をただひとり進む。この先、御母衣ダムまではかなりの距離がある。平瀬に20時に行けるか心配になる。牧戸までは外灯の数が多かったが、以降はかなり少なくなり、御母衣ダム湖に入ってから時はたましかない。庄川櫻以降、最初は走れていたが、かなり苦しくてもう走れなくなっていた。ここまで頑張ってきたツケとガス欠で喉が渇く。ペットボトルの水は空になっていた。33km手前の白鳥で買った切りで、以降飲んだものは缶コーヒーと喫茶店で2杯ほど飲んだ水と空になったペットボトル1本。いくら寒いからといってもあまりにも給水不足だった。考えれば、牧戸からは平瀬までの15km道路脇に自販機はない。悔やむ。

牧戸でペットボトルを買っておくべきだった。

足元をしっかりと見ながら、凍結に注意して早歩きで進む。ふたつ目に危険な「尾神橋」に差し掛かる。この橋は300mあまりあり、路肩が狭い。予想通り凍結していた。それもかなり広い部分、時折滑りそうになる。車が来たら、どう対応するか考えていたが、来なくて良かった。車は数分に1台くらいしか通らないので助かるが、車ももっと走っていれば本当に怖いと思う。ここでも右側車線の方が乾いている部分が多いので、できるだけ右側を進むようにした。時たま通る車はカーブが多いのにバンバン飛ばしている。こんな道路にも慣れていからだろう。2つの「尾神トンネル」辺りからは洞門とトンネルが多くなる。中に入ると屋根があるので凍っていることはない。風が通らないので、少し暑く感じる。そんな中、映画「さくら」は上空から雪の御母衣ダムが映されたシーンから始まるが、これくらいの雪景色ではなかったかと記憶が蘇る。

御母衣ダムまでが遠い。昼でも遠く感じるのに、夜ならなおさらだ。前に「福島保木トンネル(1106m)」が見えた。御母衣ダムが近づいている。このトンネルは1km余りあり、過去の経験では、それまで走れてなくても、このトンネル内は結構走れた。しかし、今回は無理だった。しんどいので「ああ～、しんどお」と言うと「ああ～、しんどお」と返ってくる。誰もいない夜



のトンネル内、どんな大声で吠えても誰にも聞こえないので、何回も繰り返す。次第に面白くなる。辛い時だけに少し元気が戻った気もした。少し行くと路面がポコポコなほど粗い3つの「福島トンネル」があり、3つ目の「福島第3トンネル」が真横から見た御母衣ダムになる。春なら手前のトンネルは通らずにダム湖側を通り、巨大ダム湖を眺めるのだが、今は40cmくらいの雪に覆われていた。

御母衣ダム(63.6km)

11月22日 17時23分



ここからは10%を超える急な下り坂のヘアピンカーブとSの字カーブが待っている。気温は下がって、-1℃、下り坂は完全に凍結していて、滑りそうにもなった。上ってくる車もさすがに慎重だ。遠くにライトが灯っているが、なかなか近寄って来ない。幻覚かなと思っていたら、ようやく車が見えた。Sの字コースを進んでいるうちに暗闇の中ではあるが、真正面から「御母衣ダム」が見える。Vの字谷に東洋一のロックフィル式ダムは雄大、且つ壮大なパノラマだ。右横にはダムを管理する「電源開発」の建物がある。下りは続き、もう少し行けば自販機に巡り合える。右に



「御母衣旅館」があった。この豪雪地帯にある旅館はみんな頑丈な造りで、見てくれではなく、中身の力強さは遠くからでも感じさせてくれる。自販機に辿り付けたので冷えた栄養剤とヨーグルト味のドリンクを2本一気に飲み干す。元気になった感じだ。



右に合掌造りの食べ処、左に「旧遠山家」があり、平瀬温泉は近い。何とか20時までに行きたいと必死で頑張っている。「大白川橋」を渡り、左の「白山登山口」を過ぎると平瀬温泉の旧道と新道の分かれ目に到



着。暗闇の中で白く光った「大白川の湯・平瀬温泉」のモニュメントが鮮やかだ。本当は温泉街のある旧道から目的のしらみずの湯に向かおうと思っていたが、迷うと困るので、初めて新道を通ることにした。道幅が広く、しっかりとした歩道もあるが、歩道は雪で覆われていた。道路のあちこちで凍っているようだ。道路工事の看板のような物が見えた。てっきり近くに来るまでは道路工事の表示板だと思っていたら、「しらみずの湯」の看板だった。



スタートして10時間、やっと温泉に辿り着けた。看板の写真を撮って、カメラを持って坂を走って下り、施設のUターン通路に差し掛かった時、デジカメの角が路面に摺れる“キーン”という金属音がして転倒した。路面が白かったので、凍っていないかと思っていたが、凍っていたのだ。一瞬の出来事で何が何だかわからなかった。左頬骨が摺れたようで、手袋は血に染まっている。どれくらいの傷なのか、さっぱりわからないが、頬は熱い。しかし、壊れたと思ったデジカメに傷は付いたが、機能が全く無傷だったことは幸いだった。本当に運が良かったと思う。もしかして、愛用のデジカメが我が身を守ってくれたのではないかと思えた。

とりあえず施設内に入って、額の状態を鏡で見たかった。フロントには老夫婦だけがいて、入浴料金は600円。私の顔を見て、「傷は大したことないですよ！」と言われたが、本人は当然、気になる。傷テープを貰って、風呂に入った。汗をかいたウェアは濡れているので脱ぎ難く、手間取る。嵩もある。中は檜風呂ともうひとつ風呂があり、露天風呂もあった。軽く洗って、檜風呂で身体を休めた。露天風呂は寒いし、温めに来ているのだから、冷めたら意味がない。風呂から上がって鏡を見ると左頬骨のところを擦り傷で赤くなって腫れ、眉の下も切れていたが、この先を進むことには影響がなさそうで安心した。ただ、帰ってから傷が残らないか、それだけが気になった。



残り時間30分、デイパックに入れてあるパンを1個半食べ、牛乳2本

飲んだ。これで白川郷までは持つだろう。喉が渴いているので、水の入ったポットから空のペットボトルに補給。また、足にできたマメの水を抜き、傷テープを巻いて痛みを和らげる。最近では知恵でデイパックのどこかに何本かの安全ピンを差し込み、いつでもマメの水抜きできるようにしている。この施設をサイトで見た時、もうひとつに思えたが、実際に立ち寄ってみるとなかなか綺麗で良い施設だった。何といても木の臭いを感じさせてくれる。昨年春のよれよれさくら道では平瀬温泉の旧道でリタイヤし、そのまま旧道からバスに乗って、高山観光に向かったが、この「しらみずの湯」に寄っていれば時間を潰せたのにと今頃思っても後の祭りだ。蛍の光が鳴り、営業時間が終わったので温泉施設を出る。

飲んだ。これで白川郷までは持つだろう。喉が渴いているので、水の入ったポットから空のペットボトルに補給。また、足にできたマメの水を抜き、傷テープを巻いて痛みを和らげる。最近では知恵でデイパックのどこかに何本かの安全ピンを差し込み、いつでもマメの水抜きできるようにしている。この施設をサイトで見た時、もうひとつに思えたが、実際に立ち寄ってみるとなかなか綺麗で良い施設だった。何といても木の臭いを感じさせてくれる。昨年春のよれよれさくら道では平瀬温泉の旧道でリタイヤし、そのまま旧道からバスに乗って、高山観光に向かったが、この「しらみずの湯」に寄っていれば時間を潰せたのにと今頃思っても後の祭りだ。蛍の光が鳴り、営業時間が終わったので温泉施設を出る。



隣には「道の駅・飛騨白山」があり、大きな駐車場は雪で覆われていた。2、3台のキャンピングカーが止まっていて、このままここで夜を明かすのだろう。再び道路に戻る。この先を計算すると43kmを10時間掛けて進めば良いので、歩き中心で進もうと考える。新道を通ったので、平瀬温泉の旅館風景を見ることはできなかつた。

新道と旧道が合流し、この先は寂しい暗闇の中を進むことになる。「平瀬橋」を渡る。道路左は急斜面の山、右は庄川でところどころにある外灯だけが明るく光っていた。車の通る数はますます減る一方だ。気温は変わらず、 -1°C 。「新平瀬トンネル」を越え、空を見上げると晴れ渡り、無数の星が見える。凄い星の数に圧倒される。星というより、川のように見える。保木脇の集落で自販機に寄るが、どこも温かい飲み物はコーヒーばかりで、何か違うものを飲みたくてもない。本当はコーヒーも飲みたいが、疲れているとむかつくので控え、ホットのイチゴミルクを飲む。辺りを見回すとどの民家からも、もう灯りは見えない。豪雪地帯の夜は早い。

「シッタカ橋」を通過。以前からどんな意味があるのかと思っていたが、「知ったか振り、知ってるか、そんなもん知るか？」などと訳のわからないことが頭に浮かぶ。ますます冷えるので、歩き中心ながら少しでも下りがあると走った。防雪シェルターの洞門の長さが増してきた。昼なら、真正面の白山が綺麗なところだが、暗闇の中では何も見えない。右90度のカーブの先に「野谷橋」が見えた。3つ目の危険な橋だ。200m弱の橋だが、左側は完全に凍っていたので、少しでも乾き部分が見える右側を進む。前から車が来たので、慌てて左に寄る。この先、白川郷までは右側にも林があり、雰囲気が変わる。見えないが、林の向こうは「鳩谷ダム湖」がある。野





谷橋から、白川郷までは概ね下り基調で70m下ることになる。平瀬に比べると積雪は10cm以上少ないようだ。荻町合掌集落まで3kmの表示があった。

「鳩谷ダム」が右にあり、そこからは下りが続く。かなり急な坂だ。前に明るくライトアップされたような光が見え始めた。合掌集落の一部がライトアップされているのだろうか？、この時期にあり得ない？、などと考える。洞門を越えると間もなく橋に掛かる。下って行くといつの間にか、「荻町トンネル」が目の前に現れた。ライトアップではなく、トンネルだったのだ。しかし、

何故こんなところに荻町トンネルがあるのか、道を間違ったのではないかと頭の中が混乱する。白川郷はいつも昼で夜中の白川郷通過は2回目だったので、イメージが違っていた。橋を渡ると公衆トイレと食事処があり、合掌集落との分岐があるはずが、橋のイメージが違い、そして公衆トイレもわからなかった。何回も通っていながら、荻町トンネルが真正面にあったことに初めて気付く。そんなイメージと現実との違いに惑わされたのだ。夜と昼とではこんなにも違うのか。



白川郷分岐「合掌集落」(79.8km) 11月22日 22時39分

何か起きて携帯がないので連絡しようもない心細い状態で、ストレスも大きくなる一方の中、一番の凍結危険地域を脱したことにやや安心感が出た。しかし、小さなこととはいえ、トラブルが続いていたので、まだまだ先は長



く、今までのことはまだ前兆と思えば思えるし、複雑な気持ちに変わりなかった。右に進んで行くと暗い中に合掌集落が見え、コースが正しかったことが確認できた。合掌集落内を進んで行くと両側には数多くのやたらでっかい合掌造りの家々が並んでいる。土産物店の一部は店内に明かりが点けてあり、ガラス越しに中を見ることもできた。家々の正面には飾り付けがあるが、これはどういう意味があるのだろうか？。魔除けなのだろうか？。本来寂しいはずの山間にある夜中の合掌集落だが、実は凄く温かさでいっぱいと思えた。それが夜中に進んでいる旅人の心に届くのだ。かなり冷え込んで、少しガスも出てきた。夜明けなら、幻想的だろうと思う。



「和田家」の前を通り、荻町トンネル出口の国道156号線と合流。「白川橋」を渡った先にはコンビニのデイリーヤマザキが見えた。以前はタイムリーだったように思ったが？。カップラーメンとおにぎりチャーハンを買って、寒い外で食べる。店内で食べたかったが、OKを貰えるかわからなかったのと言わなかった。これくらいの量で先々持つとは思えないが、量食べると胃ももたれるので仕方ない。ロールパンも買い、この先は福光に入るまで店はないので捕食に取っておく。食べ終わると再び店内に入って、店主

と世間話をする。「金沢を目指されているんですか?」「はい」から始まり、店主曰く「さくら道を走る人はいつもこの店に寄って食べ物を買って、数分世間話をして金沢を目指されますね。先日も金沢目指されて走られている方がいました」「私はその方が走られたことを知って、走ろうと思ったんですよ」「この辺りの道路には綺麗に除雪されていますが、何か撒かれているんですか?」「凍結防止剤は撒かれますが、それより雪が積もればすぐに除雪車が道路という道路の雪を全て除雪するので道路の積雪はないんですよ」「橋は凍っているかは見た目ではわかりにくいので注意して下さい。先日も大型トラックが凍った白川橋で滑り、突っ込んでいました。黒く見える凍結はわかるが、見た目わからない路面が白い凍結の方が怖いんです」

またこんな会話もした。「合掌造りの家は雪下ろしできないでしょう?」と言うと「大雪なら、しますよ。女の人でも」「えっ、50度くらいあるでしょう」「雪の量によってはしなければなりませんから。私は怖くてできませんが」、ただ項垂れるだけ。豪雪地帯の人々はハートもでかいが、やることも凄い。この沿線の人々はデイパック背負って走れば、金沢目指すことであり、人々にとってさくら道国際ネイチャーランや今はなくなったさくら道ウルトラマラソンがどれほど地域に根付いているか良くわかる。

30分近く休んで出発する。左はるかの上の方に明かりが見えるが、ホテルでもあるのかと思っていたら、東海北陸道の明かりだった。えらく高いところに高架があり、怖い感じだ。前回に夜走った時も同じことを思った。それほど高い。また旧道を進む。真夜中の寝静まった中で、水の勢いよく流れる音がやたら目立つ。どこかで休もうと小屋の扉を開けると鍵が掛かっていない。都会なら無用心だが、田舎はお構いなしだ。結局、入っただけですぐに出る。どの家も軒先一体には雪が吹き込んで来ないように防雪柵(雪囲い)が付けられていた。春には絶対に見られない豪雪地帯の風景だ。

「道の駅・白川郷」に着いたのは0時前。真夜中でも10台くらいの車が停まっていた。エンジンも掛けずにそのままシートを倒して寝ている乗用車を何台か見て、寒くて凍え死ぬぞお~と思ってしまう。この待合所は夜中でも一部は入れるので長椅子で横になって目を瞑る。ここはNHKのラジオが流れているが、この時に厚生省元事務次官とその家族殺傷事件の容疑者が出現したニュースが流れていたの30分ほど聞いていた。また腰が冷えるので白鳥で買ったカイロを貼って温める。寒くて、とても眠るところまではいかないが、眠ったら凍えてしまいそうだ。



この先はトンネルと洞門が交互にあり、特に椿原までの4kmはほとんど屋根がある。ここは「飛越峡合掌ライン」と呼ばれ、右にコバルトブルーの庄川の流れを見ながら、素晴らしいVの字の谷が続くところだが、真夜中で



何も見えないのが残念。先ず「飯島トンネル(1873m)」に入る。春ならトンネル内からポトポト雪解け水が落ちているが、今はそれもなく、道路も乾いていた。このトンネル内で出会った車の数は3台くらいだった。前から来て、すれ違う車はなかった。トンネル内は走れるかと思ったが、少しだけしか走れなかった。しかし、空気が暖かいので、走るとすぐに汗をかいた。出た後は洞門が続く、次の「新内戸トンネル(1322m)」に入る。



出たところが「椿原橋」。昨日、白鳥での昼食時にリタイヤしたランナーを迎えに行ったと言われていた付近だ。この辺りから道路工事が始まっていて、一部は片側通行だった。ひっそりとした山間の椿原の集落を越えるともた洞門が続く。椿原第一洞門から椿原第六洞門までであった。それが過ぎると「加須良トンネル(1038m)」。1km越えのトンネルが続く。

加須良トンネルを出るとそこには「合掌大橋」がある。飛越峡合掌ラインの象徴的な存在である合掌大橋は橋の塔が合掌造りをイメージしているが、暗闇の中でその姿はうっすらとしか見えなかった。ここで表示は「富山県南砺市」に変わった。これは一時的で、この先は橋を渡る毎に富山と岐



阜が交互する。「飛越橋」「成出橋」を渡ると長い下りがあり、小白川の集落に差し掛かる。春に走るとこの集落はどの家も軒先から湧き水が出ていて、その冷水で疲れた足を冷やせたものだ。



「小白川橋」を渡ってすぐに眠たくなったので、集落の外れの楢バス停でひと休みする。効いてくれるか



どうかわからないが、足底やマメの痛みを和らげるためにロキソニンと胃薬を飲んだ。まだ2時過ぎ、この分だと下梨に早く着き過ぎるので寒い中での時間調整も大変だ。20分ほど休んで出発。「火の川橋」と続くが、その後の路面は極端に粗くなっていて、下りでも走れないくらいだった。ここでわずかながら雪が散らついてきた。富山に入ってからとは違って、空は雲に覆われているので、蛭ヶ野、御母衣ダム、平瀬のような極端な冷え込みではないように思えた。相変わらず、車は滅多に通らなかった。気温は2℃。左に「であい橋」を見ながら、右にカーブして行くと間もなく「道の駅・上平ささら館」が見えた。

道の駅・上平「ささら館」(97. 3km) 11月23日 2時45分

直前に雪から大粒の雨に変わり、雨宿りにはちょうど良いタイミングだ。外気が入ってこないトイレ前のベンチでしばらく休む。ここにある喫茶「たんぼぼ」はさくら道ウルトラを走るランナーには半額で食事させて貰えたのを思い出す。今でも忘れもしない初めて参加した2001年、ここで食べた名物「五箇山豆腐丼」、それはそれは美味しかった。この時、武蔵UMCのO川さんも店に入られていて、痛み止めの効くタイミングを教えて貰った。その後、一昨年の学芸大24時間でお会いした時、その話をすると覚えていて下さった。過去のいろいろな思い出が走馬灯のように頭を過ぎる。

20分間ほど休んで出発すると雨は上がっていた。街道らしき大きな家



並みが建ち並ぶ中、由緒ある山寺の「行徳寺」、この平瀬から五箇山のさくら道の中で最高の合掌造り民家と思える「岩瀬家」が暗闇の中で薄っすらと見えた。その先の右にカーブするところにある「新屋橋」は「民謡歩道」と呼ばれ、ボタンで「こもりん節」「といちんさ節」「お小夜節」「五箇山追分節」の中から民謡を選



ぶことができ、歩道を歩いている間、民謡がスピーカーを通して響くようになっていた。ボタンを押しても何も聞こえなかったの、全部のボタンを押す。「鳴らないなあ〜」と思いながら、歩道を歩いていると大きな音で民謡が鳴り出した。橋を渡り切ってもまだ鳴り止まない。橋から100m以上進んでもまだ聞こえていて、周りの民家に悪いことをしてしまったと反省。また、小雪がパラパラし始めた。上り坂が続き、その先に東海北陸道が現れ、目の前には何本ものロータリーが見える。「五箇山インター」だ。この辺りはライトで明るく照らされていた。

間もなく世界遺産「菅沼合掌集落」の表示があった。左下に集落があるが、あまり合掌集落的な感じがしないのがこの集落の特徴だと思う。上り切ると下りがあり、走ろうとしても長く歩いているので走れなくなっていた。左の足首がゴツゴツ痛く、足首を回すが効果なし。対して、右足首のダメージはあまりない。この



頃から胃がむかつくようになった。ロキソニンと一緒に飲んだ胃薬が合わなかったのではないかな？。この先のコンビニにまでは長いので、ガス欠が怖い。「上平行政センター」「くろば温泉」前を通過。「しんどいなあ〜」と声を出すと犬に吠えられた。ここは今は南砺市だが、その前は「上平村」だった。

左に「小原ダム湖」が見え、その脇を進む。400m弱のトンネルを越え、その先の小原集落にバス停があったので入ろうとするが、入口は雪で覆われていて、入るのに難儀した。下梨まで6km、現在4時過ぎで早く着き過ぎるので、更に時間調整しないと。30分ほど休んで出発。バス停で時間調整するのは良いが、その度に身体が冷える。その先にある「小原橋」

も民謡歩道だが、こちらは1曲だけだ。ここの歩道は通らずに車道を進んだ。その先の集落ではもう蛍光灯が明々としている民家もあった。雪深い山間は夜が早い分、寒くても朝も早いかもしれない。下りの「湯出島橋」を過ぎると間もなく上梨だ。暗



闇の中に「こきりこの里」が見えてきた。ここには「村上家」がある。よく似た合掌集落の家があったので、村上家かと思ったら間違っていた。さくら道沿いでは平瀬の「遠山家」、白川郷の「和田家」、上平の「岩瀬家」、そしてこの上梨の「村上家」が国指定重要文化財で合掌造り民家の代表だと思う。白い鳥居の「白山神社」前では手を合わせて、この先の無事をお願いした。

「上梨トンネル」は時たま走りを入れながら、進んだ。もう下梨は近い。相変わらず、ポツポツと小雪が舞っ



ていて、ずっと空は厚い雲に覆われている。下梨に入った。この先のことを考え、残っている白川郷で買ったパンを缶コーヒー片手に食べた。食べてすぐに吐いてしまう。身体に残っていた水分も一緒に吐いた。これで少し楽になったように思えた。頭上にはヘアピンになっている五箇山の上り坂が見えている。この先、ここを上らないといけ
ないのかと思うと憂鬱だ。

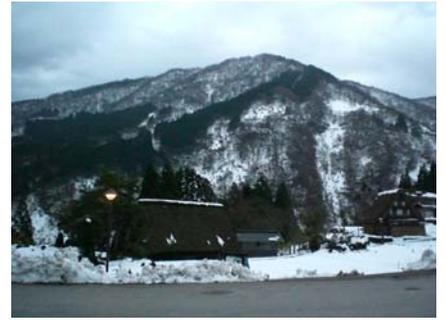
下梨(108.9km)

11月23日 5時33分

下梨のT字路を左折して、国道304号線に入る。右に行けば、そのまま国道156号線を庄川沿いに13kmほど進むと秘湯で有名な「大牧温泉」がある。この先、相倉合掌集落には早く着き過ぎるが、休むところがないのでそのまま進む。ヘアピンのコーナーのところに「道」と刻まれた石碑が建っていた。この先の五箇山に通じる道は「日本の道百選」のようだ。間もなく夜が明けるので、民家の明かりもあちこちで点き始めていた。車もほとんど通らないので、ゆっくりと上って行く。1.5kmほど上ったところで、バス停の横を左に行けば世界遺産・相倉合掌集落の表示があった。

初めて足を踏み入れるところだ。600mほど行くと「相倉合掌集落」が見えた。薄暗い中、そこは白川郷にも菅沼にもない、おとぎの世界のような感じがした。山深く、棚田、積雪、庄川の向こうにそびえる険しい山々、田畑を耕し、自給自足の貧しい農民の村、そ





んな感じだ。店の軒先にある休憩台に腰を降ろして、少し明るくなるのを待つ。富山に入ってからほとんど空が続く。入村は8時からと書いてあったが、何といても急ぐ身。6時20分頃から、集落内を見て回った。この相倉合掌集落は100年～200年前に建てられたものが多く、中には400年も前の合掌造りもあるようだ。「ここにいると、山里の温もりを感じる懐かしい風景に出会うことができ、きっとゆったりと時間が過ぎていくように感じられると思う」と書かれてあったが、その通りの本当に良いところだと思う。名残惜しみながら、コースに戻る。

五箇山への上りは正味、梨谷トンネルまで。3kmあまりで200m上ることになる。急カーブが多く、前方の頭上はるか上を通る車が見えると、あそこまで上らないといけないうかどショックを受けてしまう、そんなコースだ。息は上がり、ガス欠もあってヘトヘトになりながら、やっとの思いで梨谷トンネル手前のトイレに到着。時間は7時。空は今にも雨が降りそうな感じだ。気温は変わらず2℃。標高は590mくらいだが、山々には雪が積もり、冷たい風の通り道になるのでとても寒い。五箇山は上梨や下梨と比べて、距離はあまり離れていないが、雪はだいぶ多いようだ。



「梨谷トンネル(812m)」を越えると別世界のような赤の梨谷大橋が現れる。左に行けば「たいらスキー場」だ。ここで公衆電話ボックスがあったので、波多パパ&ママに連絡を入れようとボックスに近寄るも周りは雪に覆われていて、近寄ることさえできなかった。そして、目の前には最後の難関「梨谷大橋」がある。この下はV字谷でここを通る時はいつも足を引っ張られそうな気分になる橋だ。凍っているか心配だったが、大丈夫だった。工事で右側車線は通れなかったが、車の通らない時間帯で良かったと思う。渡り切ったところには名物「五箇山トンネル(3072m)」が威圧感たっぷりに仁王立ちしていた。



何回も通っている五箇山トンネルだが、入口と出口が鳥のくちばしのような、或いはハスの花のような形をしていたとは気付かなかった。ここまで来れば疲れ切っているので、そんな余裕すらなかったのだろう。私の身体はエネルギーが切れてしまい、もう走れない状態になっていた。長さが3072mもあるので、歩くと30分ほど掛かってしまうが、もう良いだろう。トコトコと歩きながら、時々走ってみるが、2分くらいしか持たない。トンネル内は右を走るのが良い。何故なら、前から来る車にはいち早く反応できるが、後ろから来る車は気付くのが遅いからだ。休日の朝とはいえ、車の数は少ない。右を進み、車の音がしてから、目に前に来るまで長い時間掛かるので、見えたら左車線に移る。これの繰り返しだ。

ガス欠が辛抱できないので、トンネル内途中で残っているチーズパンを少しだけ食べる。ひと切れ程度しか食べられない。今回で6回目のトンネル通過だが、このトンネルは車の通行量が少ない。生活道路のはずなのに、どうしてこんなに少ないんだろうと思う。たまたま時間帯のせいかもしれない。過去は17時を回ってからか、今頃だった。走る者にとって、少ないほうが安全に抜けやすい。トンネル内には入口側と出口側、それぞれからの距離が表示されてはいるが、3000mは本当に長いと感じる。左カーブの先が明るくなり出したので出口は近い。



話は使えなかった。グリーン電話は使えないものが多くて困る。後日、カシミールで五箇山を見た。トンネルの上を中部北陸自然歩道が通っている。トンネルの左は「人喰谷」という凄い名前。何といても等高線の間隔が凄く狭い。それだけ、厳しい谷なのだ。通っているだけでは感じないが、外から見た五箇山はもっと凄いところだと思う。

これから先は4kmで330m下っている。辛い下りになりそうだ。この下りは足にダメージがある時と、そうでない時では雲泥の差が出る。走っては立ち止まり、また走るを繰り返す。ポツリポツリと雨が落ち始めた。道路両側は除雪された雪で覆われ、路肩も狭くなって走り難い。路面は粗くて、マメの足底には負担が掛かる。左足首は炎症でかなりダメージを受けていた。右足は大丈夫だが、太股の付け根がギクシャクする。ここは右側に登坂車線があるので右を進んだりして、できるだけ走りやすい部分を選んだ。急坂なので、車がスピードを落とすように溝の刻まれた路面が延々と続く。空はグレーの雲に覆われ、本格的な雨に変わり始めていた。ようやく左に城端の町が近づいて来る。そして、やっとの思いで下り切れた。疲れた。

「新打尾橋」を渡ると大鋸屋の集落。信号の少し手前で2004年春にひとりさくら道をした時、民家の自販機前で少し話した滋賀・八日市出身のおばあさんは元気にされているだろうかと気になった。今回もこの自販機に寄るが、おばあさんには会えなかった。あの時は60歳代に見えたが、もう70歳を超えられているかもしれない。更に雨は強まり、肌寒くなってきた。雨天の方がより効果的と思えるゴアテックスを着ていて良かったと思う。ここからはほぼ真っ直ぐな道が続いた。

ネイチャーランのコースは大鋸屋交差点で左折して福光に向かうと聞いているが、さくら道ウルトラのコースは真っ直ぐだ。この先にグレー電話があったので波多パパ&ママ宅に電話を入れたが、もう留守のようで電話は繋がらなかった。大きなバス停だろうか、休憩所があったので休む。その奥に大きな建物があつたが、南砺市役所の城端庁舎かもしれない。「城端曳山会館」が見えたので何となく入って少し見ていると有料ということで注意され、出て行く。硝子越しに見た曳山はそれは絢爛豪華だった。城端は「越中の小京都」と呼ばれるが、こと国道304号線沿いだけを見ると、人工的で何よりも見かけの綺麗さばかりを追っているように思え

話には使えなかった。グリーン電話は使えないものが多くて困る。後日、カシミールで五箇山を見た。トンネルの上を中部北陸自然歩道が通っている。トンネルの左は「人喰谷」という凄い名前。何といても等高線の間隔が凄く狭い。それだけ、厳しい谷なのだ。通っているだけでは感じないが、外から見た五箇山はもっと凄いところだと思う。



てならなかった。

少し先の左の奥まったところには茶色瓦の「城端別院善徳寺」の山門がある。山門を潜って中に入ると本堂と思われる建造物は修理中だった。山門が立派だけに、本堂がやや見すばらしく見えた。この通りには店がたくさんあるが、ちょっと寄って食べられる、食べ物売っている店はひとつもない。国道なので1軒くらいは店があっても良いのにいつも思う。



強かった雨もこの辺りでは止んでいた。突き当たりのT字路を左折して「城端橋」を渡ると右側に城端線最終駅の「城端駅」が見えた。田舎のローカル駅らしい雰囲気だ。ひとりさくら道をする場合は白鳥の北濃から、この城端までは絶対に自力で来なければならない。何も足がないからだ。あってもコミュニティバスを乗り継いで来られるものではない。実は「城端駅」がここにあったことを初めて気付いた。T字路の右手前だとばかり思っていたから。ここから福光まではもうそんなにはない。腹が減って崩れそうだが、もう少し行けばファミリーマートがある。

右に営業している食堂があった。ここは4年前に入って気分を悪くした店だった。“愛想の悪い店主で、結構待たされた。飲みたかったみそ汁がやけどしそうになるくらい熱くて手を付けずに残した。結局、ご飯と焼き鯖だけ食べた。悪く捉えると「汗くさい奴が店に入りおって」とばかりにみそ汁は嫌がらせととれた”、こんな風に2004年道中記には書いている。この先、大きな交差点の角にガソリンスタンドがあり、その少し先にファミリーマートの看板が見えて来た。

9時40分、ようやく福光に入れた。雨は完全に上がり、青空すら見え始める。ゴアテックスだと暑い。幕の内を食べたかったが、嫌いな鳥の唐揚げが入っていたので、牛丼弁当を買って、外に座り込んで食べる。ご飯らしいものは蛭ヶ野で食べたカレー以来。ひと晩寝ていないので長く感じた。当たり前のことだが…。

外で弁当を食べていると陽が差し込み、雨上がりで蒸し暑くなってきた。ウインドブレーカー、重ね着の半袖シャツ、毛糸の帽子を脱いで、昨朝に走り出した時のウェアに戻した。歩道を進むと左に「松島燃糸福光工場」があった。かつて会社上げてエイドをして下さり、ビールやそばを頂いたのを思い出す。たんだいさんと一緒になった時、私がビールを飲んでいて、「たんだいさん、如何ですか？」と言うと「途中で飲むと酔っ払うんで、ルネスに着いてから」と言われた。日本のウルトラマラソン界に歴史を刻まれてきた、たんだいさんと今一緒に走れていることに感動したものだ。

その先は歩道のないところがあるので気をつけて進む。間もなく波多パパ&ママに会えるかと思うと嬉しくなって、走れるようになっていた。福光駅前までは歩道も凹凸だらけで危険なところだが、車を見ながら、来なければ車道を走った。「南砺警察署」「南砺市役所福光庁舎」前を越え、福光駅前を左折すると「坂上松華堂」がある。今回は通り過ぎて、先を急ぐ。「福光橋」を通過。欄干から覗き込むと「小矢部川」の流れは緩やかだ。

福光橋(130.5km)

11月23日 10時26分

東町の交差点を右折し、バイパス側に向かう。バイパスは広い道路だ。しばらく進むと「楽蔵グリーンモール福光」が右に見えて来た。波多パパ&ママと1年3ヶ月振りの再会だ。何かドキドキする。ショッピングセンターに入り、店を覗くと若い女性の方だけだった。確か、この女性は2004年春にもお見掛けしたと思う。事情を話して、休ませて貰っているうちにパパもママも帰って来られた。いきなり「痩せたんじゃない！」とパパから言われた。「体重は変わらないですよ」と言う。自分ではそんな風に思っていなかったが、確かに頬は以前よりけていると思う。携帯を電車に置き忘れたことや凍結で転倒したことなどの話をし、荷物を「金沢ゆめのゆ」に送ったが、連絡ができていなかったのをお願いをした。枸杞さんが会いに来て下さる予定だが、連絡手段がないためにパパからメールを入れて頂いた。果たして、会えるだろうか？。お茶、お粥、和菓子、おかきなどをご馳走になりながら、世間話が尽きない。2週間前に走られたG藤さんの写真も見せて貰ったが、まだお会いしたことのない方だった。



今回、10日ほど前にさくら道を走ろうと決意し、波多ママの1999年のさくら道完走記を読んだ。正直、凄と思った。そして、その波多パパ&ママに会える、だからさくら道なんだと思ってここまで来られた。本当は去年春も

さくら道で会うために岐阜から金沢を目指したが、平瀬でギブアップしてしまった。2年越しの念願が叶って、嬉しいのひと言だ。ママさくら道交流会で白鳥の公園に植えた庄川桜の実生を見に行かれたそうで、それが大きくなっていないことを気にされていた。さくら道の友として、思いは同じだ。

最後に波多パパ&ママを囲んで3人で写真を撮って貰う。写真を撮る時に「にゃ〜ん」と言って、店の若い女性はシャッターを押して下さったが、思わず顔がほころんだ。約1時間ゆっくりさせて頂いて、名残惜しみながら店を後にする。ママからは「この先の紅葉が綺麗だから、見ながら行って」と言われた。まだまだ金沢までは遠い。空は青空も見えているが、徐々に灰色になりつつあった。

バイパスを真っ直ぐ進んで、「道の駅・なんと一福茶屋」に寄ると3連休とあって、たくさんの方が寄っていた。横には中国風の赤い柱の建物があった。「福光紹興友好物産館」といい、紹興市と福光は友好関係を結んでいるので、ここで物産展をやっているようだ。中のベンチに腰掛けて、足底にできたマメの水を抜き、傷テープを貼り直して先を急ぐ。

少し先の右側にある「華山温泉ホテル」まで差し掛かると小雨が降り始めた。金沢方面は灰色の雲に覆われている。かなりの疲労と左足の痛みで走ろうとしても、もう走れない。左に「川合田鉱泉」という温泉施設があり、この先は寂しくなる。道路右側に自販機があったが、これはパスした。それは大きな失敗で、次の自販機に辿り着くまでが長かった。多少の眠たさもあって、取りあえず「新蔵原トンネル」までは歩こうと決意する。新蔵原トンネルを出ると、ここから先は農村地帯が続き、後半は緩いアップダウンも時々ある。昼でも夜でもこの辺りからは辛くなる。時たま走りを入れながら、雨の中をひたすら前だけを見て進む。

綺麗な紅葉が見えて来た。辺りを見渡すと滋賀の平地とは違う紅葉で、針葉樹が混じっていると紅葉に立体感が生まれるようだ。茶色の中に、緑や赤、黄と素晴らしい。時折、柿の木があると風情を感じる。今年の柿は豊作だったが、この辺りはどうだったのだろうか？。変化の少ない農村地帯の丘陵地をただただ前に行くだけ。道路右に消防署があって、南砺市消防団と書かれた消防服姿の人が集まっていた。年末を前にその準備か？。

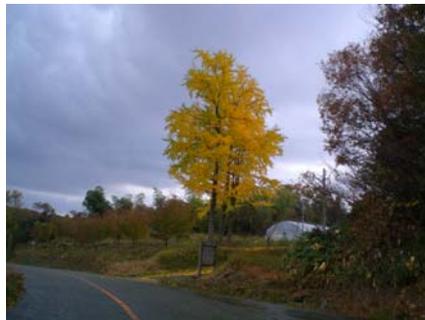
上砂子谷の集落の外れによく自販機を発見。こんなに遠かったのかと思う。そこそこ強い雨が降り続いていたので雨宿りをしながら、缶コーヒーを飲む。少し下った先に赤の欄干の橋が見えた。そこから先の新しい道は



ずっと上り坂になっているが、これは新道。今回はここで右折して旧道のさくら道コースを進むことにした。高窪の集落内のくねくねした道を上って行くが、新道もすぐ左を走っていた。2006年に走った時は夜中で、えらく迂回しているように感じていたが、実際は目と鼻の先にあった。上り切ったところが、「富山・石川県境」だ。

通り過ぎたところに変な店のようなものがあった。何でもかんでも集めて商売しているのか、集めた物をただ並べているだけなのかよくわからないが、店のような、小屋のような建物だった。声を掛けられないように見て見ぬ振りをして進む。破れた鯉のぼりやその他よくわからない物も外で靡いていた。看板の名前をメモしていなかったのがミスだった。

すぐ先では暗い空に黄色付いた銀杏の木が鮮やかだった。銀杏は並木より、田園地帯にポツンと立っている方が晴れがすると思う。ここで新道と交差するが、そのまま旧道を進む。田舎の家が並んでいるが、弱かった雨がいきなり豪雨に変わった。幸いにも民家のガレージ前だったので、雨宿りさせて貰う。凄い雨と



なり、道路は川に変わっていた。脱いでいたウインドブレーカー上下を着て、手袋もフリースに変えた。空を見上げていると家人が来られた。「雨宿りさせて貰ってます」「どうぞ、ごゆっくり」、こんな雨の中でゆっくりしていたら、風邪を引いてしまうが、小止みになるまで20分あまり辛抱した。



新道と合流すると歩道のない道路を車が頻繁に通る、かなり危ないと思った。その先の左に広い場所があった。ここはさくら道ウルトラがあった頃、三重の三滝MCが「本家手抜きうどん」エイドをして下さっていた場所だ。いつも辛くて、寂しい真夜中だったので、余計に有り難かった。わざわざ三重県から、遠く石川県まで走友が走られているとはいえ、自前で多数のうどんを用意してエイドをして下さること自体にさくら道の意義の大きさを感じていた。今は何もない広場だ。

ここから先は下りが続くが、車はひっきりなしに往来する。路肩が狭いので止まっては走りを繰り返したが、下りなのでできるだけ走るようにする。この辺りは何もなくて、左を幅の狭い川が流れている。山の合間から出ると水田が目の前に現れる。清水谷の集落があり、その先はまた山の間に水田があるだけで、非常に寂しく感じるところだ。相変わらず雨は降り続いていた。空を見上げても止むような気配はない。ここを通るたびに思うのは、清水谷を越えるとずっと集落が続いていたような感じがし、疲れ切っているせいか、その先でまた元の場所に戻ってしまったような錯覚になる。大会の時は真夜中で幻覚の中にいたこともあった。

歩道も狭くて進み難い。やっと家の建ち並びが見えて来て、少し先の交差点には「古屋谷」とあった。県境から古屋谷までの5.2kmは長かった。1時間10分も掛かっていた。雨は降り続き、雨宿りの時間ロスや身体の冷え、足の具合など限界で、この先もいつ大雨が降るかわからなく、この付近で兼六園経由は諦め、森本から電車に乗ろうと決意する。道中のガス欠の影響もあると思う。これから森本までも長い。もうほとんど走れなくなっていた。するとまた強い雨が降り出し、たまたま向かいの家にガレージがあったので、そこで雨宿りをし、波多ママから頂いた、おかきをつまみに缶ビールを飲む。

いつになったら雨が止むのか、さっぱりわからない状態だ。少し、小止みになれば、また歩いて進むとまた大雨に、今度は誰も人の住んでいないような家の軒先で雨宿り。道路を走る車からは水しぶきが飛んできた。再度、小止みになったので前に進むが、また強い雨に変わった。またまた民家の軒先で雨宿りする。この雨はかなり強烈で、道路は一気に川のようになった。じっとしている時間が長いので、寒さで疲労度が増す一方だ。地図で現在地を確認するが、1/25000地形図と地名とが一致せず、戸惑う。この状態ではどうしようもないので、雨足は相変わらずだったが、雨宿りは止めて前に進んだ。

ローソンのあるY字路でまた強い雨に変わったので、ローソン狭い屋根で雨宿りする。2006年それぞれのさくら道ではW穂井さんと一緒に進み、ここで道を間違っ左に進んだ苦い経験があったので、コースを確認して右斜めに進む。森本まではもう2kmあまりだ。東海北陸道の高架を潜る。この左には「金沢森本インター」がある。今までは車が多かったが、右に入ってからは一気に車の量が減った。まだ15時台だが、天気有加減で薄暗く、身体はますます冷える一方だ。サンクスのところまで右に折れるが、路肩が狭く、車からの水しぶきを何回か受けた。繁華街に入り、森本交差点が見えた。やっと辿り着けた。もう頭の中には温泉しかなかった。

森本(151.2km)

11月23日 15時57分

すぐにわかるだろうと思っていた「森本駅」がわからない。店に入って聞くと目の前にあった。モダンな駅で2階



に改札があって、ここはモノレールのような高架になっていた。時刻表を見ると30分弱の時間待ちがある。金沢といえば大きな町だが、北陸線の本数は少ない。寒くなってきたが、仕方なくホームのベンチに座って待つ。枸杞さんには6時半頃にゆめのゆ到着予定とメールしているので、もしかして道中で私を探されているのではないかという心配が常に付きまとったが、どうにも連絡手段がないので、どうしようもなかった。電車が入って来たが、何行きかわからなかったの、寒いベンチにそのまま座っているとそれが金沢行きで、ホームに電車が入ってから10数分も待ち時間があつたのだ。そんなことはわかる由もなかった。次の東金沢駅は「ルネス金沢」のすぐ

近くにあり、閉館された懐かしのルネスが気になった。金沢駅に着くとそばを一杯食べて身体を温める。本当はそばより、温かい出汁を飲みたかった。

ここから、「金沢ゆめのゆ」までバスに乗りたいが、日も影ってきて、何行きに乗れば良いのかわからなく、歩くことにした。3kmあまりだと思う。駅前を左折して、中橋交差点に出て右折、そのまま真っ直ぐに国道8号線の方に向かうが、疲れ果て、足の痛い身には長くて遠いゴールまでの道のりだった。西の空を見ると鮮やかな濃いオレンジ色の夕陽が目に留まった。何と綺麗なんだ。厳寒のさくら道を終えた私を祝福しているかのようにも思える夕陽だった。片側3車線ある大きな道路の両側にはいろいろな店が立ち並んでいる。もうすっかり日も陰て、真っ暗だ。ようやく先に国道8号線の高架が見え始めた。この信号を渡り切った後、左折し、しばらく歩くとボーリング場が見え、その奥に「金沢ゆめのゆ」が見えた。11月23日、17時10分に本当のゴールがあった。



金沢ゆめのゆ(155.5km)

11月23日 17時10分

金沢ゆめのゆにて



中に入ると3連休の中日でもあり、人でいっぱいだった。そして、次から次へと人がやって来る。値段は翌朝10時まで居ても1570円と安い。招待券や広告のチラシを持って来る人も多く、混んでいる筈だと思った。健康ランドという名前だが、実際はスーパー銭湯の大きな感じの施設のようだ。送り届けていた荷物を貰って、もし枸杞さんが来られたら探されるのでと思い、受付カウンターの隅で荷物の整理をした。肉刺も潰した。おそらく入場者からは汚がられたことだろう。

しばらくの間、そこで枸杞さんを待ったが来られなかったの、温泉に浸かって、疲れと汗を落とす。浴室も凄い人だった。髭を剃ろうとしたが、浴室のあまりの熱気に塗ったシェービングクリームが汗で流れ出し、髭を剃ることができなかった。ここは食べ物の値段が高い。夕食は食べやすいラーメン、餃子、ご飯に生ビールでひとりお疲れ様をした。ひとりだと寂しいものだ。この広間は騒がしくて、落ち着けなかった。居眠りをしながら、テーブルに座っていると、もう22時になっていた。



その時間になっても、小さな子供が館内で大きな声を出して走り回るわ、若者がいつまでも騒ぐわだった。子供、若者以外にも、テーブルに両足を掛けてうたた寝する客や徘徊のようにあちへ行ったり、こっちへ行ったりを繰り返す客など大人でもいろいろな人がいて、リラックスできる雰囲気ではなかった。

その内、また腹が減ったのでおにぎりそばを注文する。この施設は3階立てで2階にフロントがあり、1階が仮眠ルーム、3階が風呂になっている。この行き来が、エレベーターはあるものの、足が痛い大変だった。1階のテレビ付きリクライニングチェアのある仮眠ルームはいっぱい寝るところがなかったの、仕方なく3階の一時

休憩所で寝ることにした。置だが、0時を回ると暖房も省エネに変わり、カーテンのない窓際はかなり寒かった。タオルケットを探して被ると朝まで何とか辛抱できた。何回もトイレには起きたが、それでも翌朝は7時頃に気持ちよく目覚めた。朝風呂に入り、新聞を見ながら、ゆっくりモーニングを食べて、8時半頃に「金沢ゆめのゆ」を後にする。

前日にバスのことを従業員に聞いたが、バスの客は滅多にいないのか、全く頓珍漢なことを言われた。「金沢駅まで直行するバスはないので、中橋まで歩かれて、バスに乗られたらどうですか？」「藤江というバス停まで歩くんだったら、ここからタクシーの方が安いと思いますよ」、ゆめのゆから中橋までは2.8kmほどあり、中橋から金沢駅までは400mほど、たった400mのためにバスに乗れというのか。400mバスに乗るために2.8km歩けというのか！。バスより高いタクシー何かあるものか、もう少しそれくらいの常識は知っておいて貰いたいものだと思いを覚えた。バス停に行って気付いたのは、ゆめのゆにあった行き先は実際と全く違って、バス停で戸惑った。端的に言えば、コンビニに行って、その地域のことを知らないアルバイト従業員に住所を聞くようなものだった。

失礼ながら、ジャンボスーパー銭湯だと思った。時間とサービスだけなら、スーパー銭湯より安いと思うが、この値段でそれを望むのは無理だろう。リゾートの「ルネス金沢」との比較するのは値段を考えると酷だ。ルネスは落ち着きがあり、値段差ある分、伸び伸びとリラックスできると思う。しかし、そのルネスがなくなった今、比較すること自体が邪道だとは思いますが…。このような施設にひとりしていると暇で仕方なく、何食も食べてしまうようになり、結局はそんなには安く上がらないのが現実だと思う。

帰路

ここからバス停までがわからなかったが、何とか辿り着くことができた。そして、2.5km先の中橋までバスに乗ったが、結構長く感じた。こんなにも足を引きずりながら、歩いたのかとびっくりした。駅前の「アパホテル」の喫茶のネットはフリースポットだったので、モバイルPCで無線LANしようとしたが、何故か繋がらなかった。コーヒーを飲みながら、忘れないうちにPCにメモして、2時間を過ごす。

帰りは普通電車を乗り継いで帰るので、先ず11時4分の電車に乗り、芦原温泉まで行く。ここで40分近く待ち時間があつたので、金沢で買った弁当を食べ、缶ビールを飲み、今度は敦賀行きに乗る。敦賀で20分弱してから



新快速に乗った。近江塩津では30分待ちの乗り換えがあり、琵琶湖線経由の電車に乗って、長浜には15時45分頃に到着。ここで3日振りに携帯を手にした。普段はそんなにも携帯が必要でない私でも、こんな時に携帯がないと不便を超越していた。枸杞さんからメールや電話が入っており、森本まで来て下さっていたが、若干私の方が早く通り過ぎたようで、申し訳なかったと思っている。そして、17時過ぎに家に帰れた。

雪のさくら道を終えて

雪の道中で思ったことは雪の重みで枝が折れ、倒れてしまう豪雪地帯だからこそ、育ちにくい桜をあえて植え続け、世話されたことに良二さんの行為の価値があるのではないだろうか。その先には雪解けされて明るくなった春には、さくらのトンネルに綺麗なピンクの桜が咲き乱れる。そこに人々の幸せがある。

「知ってるつもり」で佐藤良二さんの姉、故尾藤てるさんが話された「雪で桜の木を植えても植えても、こうやってなくなってしまふんです」と豪雪の中で言いながらも桜を守ろうとされている姿に感動した。その姉てるさんも今年3月27日に81歳で亡くなっている。そのことはG師匠からメールで連絡を受けた。時代、年月と共に忘れ去られていくものが多い中、残さなければならぬものは絶対に残さないといけなと思う。

さくら道のことを知って14年余り、初めて走ってから7年余りが過ぎ、さくら道のコース上だけは概ねわかったつもりだ。大会がなくなって、ひとりで走るようになってから、時間もあるせいでさくら道という豪雪地帯の持つ民話的な部分を強く感じるようになった。東海道や中山道のような旧街道の歴史も良いが、あの深い山に囲まれたこの街道の持つ視界の大きさは、全く異質の感動を覚える。

旧街道は何度も通ると知り過ぎて感動がなくなることもある。さくら道は名古屋と金沢を結ぶ旧国鉄バスの最長

路線・名金線だったこと。そこに桜のトンネルを作ってみんなが幸せに暮らせるようにと、とんでもない壮大な夢を掲げた国鉄バスの車掌がいて、それを実行したこと。その志は今も人々に引き継がれていること。名金線はなくなったが、今はさくら街道として人々の心に根付いていること。さくら道はウルトラマラソンのためのコースではなく、旧街道同様にもともと道であったこと。だから、大会がなくなろうとも道は永遠に残るので走り続けられること。人々の心の中にも、生活の道としても、この道が重要な位置付けにあることに限りはない。だから、如何に時代は変わってもさくら道は永遠ということになりやしないかという風に思える。

来年も走れるだろうか？。それはわからないが、さくら道を心の拠り所のひとつとして毎年走ろうという気持ちだけは持ち続けたい。そして、私個人的に思うのは、さくら道は名金線を辿るひとり旅が似合うコース。みんなわいわい走れば、さくら道の良さをかき消されてしまうような感じがしてならない。呼び掛けがあれば別だが、そうでなければ今後も私は佐藤良二さんの思いを感じながら、さくら道をひとりで旅することだろう。

佐藤良二さん 【フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』より】

佐藤良二

佐藤良二(さとう りょうじ 1929年8月3日－1977年1月25日)は『太平洋と日本海を桜で結ぶ』という夢を実現しようと、名古屋市から金沢市までを結ぶ名金急行線の路線沿いに桜を植え続けた旧国鉄バスの車掌である。

◆来歴

岐阜県郡上郡白鳥町(現在の郡上市)出身。

1953年、国鉄に入社し、美濃白鳥自動車区(後のJR東海バス美濃白鳥営業所<現在廃止>)に配属。名金急行線の車掌となる。御母衣ダム建設に伴い、水没地区にある桜の木の移植を撮影記録することを依頼されている。その後、名金急行線の路線沿いに移植された荘川桜が再び開花したことに感銘を受け、1966年頃より名金急行線の道路沿いに桜を植え始める。以後、余暇を苗木の手入れや植樹に費やし、生涯に約2,000本の桜を植えたと言われる。

1977年1月25日、癌のため47歳で死去。

◆植樹活動の影響

彼の活動は、御母衣ダム桜移植の記録撮影を担ったことで、日本さくらの会から表彰されたことや、生前から新聞やテレビで取り上げられていたが、全国的に有名になったのは彼の死後、彼の活動が国語の教科書に取り上げられたことが大きい。

また、彼の手記を元に中村儀朋が『さくら道』を出版、1994年には、この本を原作とし、神山征二郎が監督を務めた映画『さくら』が公開され、佐藤役は篠田三郎が演じた。また同年、名古屋城から兼六園までを2日ばかりで走破する、第1回さくら道国際ネイチャーランが開催され、現在も毎年4月下旬に行われている。

◆生活と評判

一般的には、桜の撮影から感動して休暇を植樹に費やしたといった「美談」が多いのだが、生活は決して楽ではなかった。国鉄の給料だけではやっていけず、家計を支える上で自宅を民宿にして営業していた。

また、一緒に桜を植えに行った運転士の話だと、彼は給料をほとんど桜につぎ込んでいたこと、同時期に体調を崩しがちで病休が多いことも、給料に反映されていたようだ。そんな状態で家庭を省みないで桜の世話をすることに対する妻の苛立ちは、映画『さくら』でも描かれている。

それでも、名金線は彼なしには語れない。実際、没後30年経っても、沿線では「国鉄の良ちゃんを知らんものはおらん」といわれるくらいであった。また、名金線廃止の時も美濃白鳥駅では、白鳥町(当時)によるセレモニーが行われ、町長が彼の功績を讃えていた。

その自宅の民宿「てんご」だが、現在でも営業している。郡上市白鳥地区はスキー場が多く、冬季は学生の合宿に、夏季は建設現場の飯場(宿舎)代わりに利用されている。映画『さくら』撮影時にもスタッフの撮影基地として使われた。出演したキャストのサイン色紙が館内に展示されている。

2003年最後のさくら道ウルトラ、ルネス金沢での懇親会

懐かしいルネス金沢・大広間でのさくら道ウルトラ、最後の懇親会。今年10月はじめルネス金沢は閉館された。思い出の詰まったさくら道ウルトラ、ルネス金沢はなくなったが、さくら道は永遠である。



太平洋と日本海を桜でつなごう

